

小野隆助の太宰府観光事業

小野隆助は、天保11（1840）年に太宰府天満宮の社家に生まれ、幕末の勤王家真木和泉を伯父に持つ太宰府出身の政治家です。太宰府との関わりについては、明治35（1902）年の太宰府天満宮の一千年大祭において、彼が中心となり文書館建設、神苑拡張、馬車鉄道敷設などの太宰府観光事業を実現させたことで知られています。

え、池を掘って花を植えたり。毎日毎日とても楽しそうに山に行っていました。朝顔などが咲くと絵葉書に写して、その前に私をよく立たせては写したものです。

当時10歳くらいだった孫娘には、「太宰府の観光のこと」に一生懸命だった祖父の姿がよほど思い出深かったのでしょう。述懐した内容からでも、当時の生き生きとした様子が伝わってきます。手紙はさらに続き、



興味深い内容の手紙が残されています。手紙の書き手は彼の孫である川原不二子で、戦後になって小野家の名跡を継いでいた小野雅子（隆助のもとは少年期の大半を過ごした大鳥居信光の次女）に宛てたものです（「小野隆助碑誌」）。内容は彼女が小学校3年生くらいの際の記憶。子どもものころに見た自分のお祖父さん（隆助）の様子が書かれています。

のころのことなので何月何日ということまでは分かりませんが、太宰府のために力を入れたことは祖父が一番だと思います。

と書かれています。お茶屋の名前は斬新ですが、観光客のための休憩所を作るなど、熱心な観光事業の様子がうかがえると思います。「太宰府のために力を入れたのは祖父が一番」という言葉が印象的です。

私（不二子）が太宰府の小学校に通っていた時、まだ祖父は50くらいでとても元気で、文書館を建てたりと、太宰府の観光（事業）のことに一生懸命でした。東公園に梅をさかんに植えたり、神社の後ろに小さな滝を造ったり、今では文書館の石碑が建っている所、ちよつと先に四季花壇をこしら